

僕は曾祖父が作ったトマトが忘れられない。そのトマトは、真っ赤な色をしていて、甘くて、少し塩味を感じ、皮も薄く、硬さもほどよく、匂いも良くて、とても美味しかった。同じ味は中々探せない。トマトが出来上がる六月頃になると、曾祖父は、「いただきます。」と一個一個のトマトに言いながら収穫をしていた。そして僕は収穫したてのトマトを、丸かじりをして食べていた。今すぐにでも僕のカンバーワンのトマトを食べたいけれど、曾祖父は、もう作れない。

今年、曾祖父のトマトを作ってみたくて、僕はトマトの栽培に挑戦した。曾祖母に作り方を習い、育ててみた。雨に当たらないように植える場所を考え、毎日水やりをし、トマトの様子を確認した。時には家族に協力してもらいながら育てた。順調に育ち、ついに赤い実になり収穫をした。あの時と同じように

収穫したてを食べてみた。確かに美味しいが、  
曾祖父が作ってくれていたトマトとは違う。  
何が違うのか考えてみた。曾祖父は僕が遊び  
思い出の写真を見てみた。曾祖父は僕が遊び  
に行くといつも笑顔だった。そして、僕も笑  
顔だった。赤ちゃんの頃はたくさん抱っこを  
してくれていた。少し大きくなると、一緒に  
たくさん遊んでくれていた。写真を見返すと  
もう会えないとわかっているから、涙がでそ  
うになる。

僕は美味しくなるように願いを込めて作っ  
たけれど、きっと曾祖父はその願いを込める  
だけではなく、家族全員のことを思い、喜ぶ  
顔が見たくて大切に育てていたのだ。曾祖父  
の愛情には叶わないけれど、曾祖父のトマト  
に近づけるように、僕のトマト栽培は、曾祖  
父の笑顔を思い浮かべながら、また来年も挑  
戦は続く。